

タイの高校で求められる日本人日本語教師像 ——学生とタイ人教師の視点から——

中井 雅也

1. はじめに

現在タイでは、初等中等教育機関での学習者数が増加しているのに伴い、教師数も増えている。しかし、実際にその職務の大半を担っているのは、日本語能力試験 3 級合格レベルの日本語非母語話者教師（以下、「タイ人教師」）である。以前は、日本語母語話者教師（以下、「日本人教師」）といえは日本の公的機関などから派遣される日本語教育の専門家が中心であったが、近年は大半が民間の派遣会社や個人契約で訪タイする、経験の少ない教師である。タイの日本語教育の現状については国際交流基金「日本語教育国別情報 2007-2008 年度タイ」⁽¹⁾ を参照されたい。日本語学習者が増え、日本語を開講する機関が増加するに伴い、今後ますます日本語教師の需要も増えていくことが予想される。そして、日本人教師にもタイの日本語教育に貢献することが今以上に求められるだろう。

それでは、タイの初等中等教育機関、具体的には学習者数が多い後期中等教育学校（以下、「高校」）で、日本人教師はどのような役割を果たすことができるであろうか。また、どのような資質・能力が求められているのだろうか。「教育は結局人にある」ということばがある。これは教育をする人の如何によって、その効果が左右されるという主旨であるが、実際に教壇に立って教育活動を行なう教師の役割は重大である。そこで、本研究では、タイの高校で日本語教育を効果的に行うことができ、さらにタイの日本語教育に貢献できる人材の特性を探るために、タイの高校で求められる日本人教師像を明らかにすることを目的とする。

2. 先行研究

海外で働く日本人日本語教師に求められるものについて述べたものには伊勢田他（1997）、佐久間（1999）などがある。しかし、どちらも日本語教育の専門家に求められる資質や能力についての言及である。現在、タイの高校で教える日本人教師は、公的責務を負った専門家ではない一般の教師が大半を占めるが、現状とは違いが見られることが予想される。

一般的な教師に求められるものを学習者の視点から研究したものとしては、縫部（2001）がある。縫部は、日本語学習者が求める日本語教師はどのような行動特性を持っているかについて調査し、4 つの因子を抽出している。因子得点が高い因子（日本語学習者が最も教師に望んでいる因子）から順に「学習者への心配り」「教職意識」「教授法の知識と能力」「日本語の専門的知識」である。縫部は、この結果を踏まえた上で、以下のようにまとめている。

第二言語としての日本語の教師は、日本語の専門家以上の存在であり、その「以上」ということの中味は教師である前に一人の教育者であり、教育者である前に一人の人間ということである。(中略)最後に、教師として目標言語である日本語、目標文化である日本文化、その他の日本社会・経済・社会などの日本事情や世界事情に関する認識を駆使できるようになることが期待されている。(p.21)

これは、日本語教師としての「専門性」以上に、一人の人間としての「人間性」や教育者としての態度が重要であるということを示唆している。

横溝(2002)は、一般的な教師や日本語教師の資質についての先行研究をとりまとめ、日本語教師の資質として、「人間性」「専門性」「自己教育力」の3つが必要であるとしている。日本語教師にとって、「専門性」が重要であることは言うまでもないが、一人の人間として教壇に立つ以上、学習者との人間的な心の交流や信頼関係を築く「人間性」が必要であると述べている。さらに、教師が成長し、より良い授業ができるようになるには、「専門性」や「人間性」を高めていくことが重要であり、この2つの資質を高めていくエネルギーとなる「自己教育力」の必要性を指摘している。

海外の学習者が求める日本語教師については、縫部他(2006)が7つの国と地域(ニュージーランド、タイ、韓国、中国、ベトナム、台湾、アメリカ)の19大学の学習者を対象に質問紙調査を行い、「優れた」日本語教師の行動特性を構成する概念の比較を行っている。有効回答が少なかったアメリカを除く6カ所で共通して抽出された因子は、因子得点が高い順に、①日本語教師の専門性、②教師の人間性、③授業の実践能力、④コース運営、⑤指導経験と資格、である(②が二つあるのは同得点のため)。家根橋他(2006)は、この結果をタイの大学生に特化して報告している。これによると、タイでも「日本語教師の専門性」がもっとも高く求められており、次いで「教師の人間性」「授業の実践能力」「コース運営」と続いている。そして、最後にやや得点差をつけて「指導経験と資格」となっており、タイ以外の5カ所の大学生とほぼ同じ特徴を示した。

縫部他(2006)、家根橋他(2006)の研究は、調査対象国や地域を増やし、比較することを目的としている。そのため、全ての回答を一括して分析しているため、特定の国や地域の特徴を浮き彫りにするには限界がある。そこで、本研究では、縫部他(2006)の手法を生かしつつ、対象をタイの高校生と日本語を教えるタイ人教師に絞って、調査を行うことにする。

3. タイの高校で求められる日本人日本語教師像についての調査概要

3.1 予備調査

調査の目的は、タイの高校で日本語を学習する学生及びタイ人日本語教師が求める日本語教師像を明らかにするために、本調査に向けて質問項目の妥当性を探ることである。予備調査は2008年2月の約一ヶ月間、筆者が直接タイ国内で行った。バンコク及びバンコク近郊の8高校のタイ

人教師 12 名及び学生 250 名の協力を得ることができた。

調査は集団形式で質問紙に回答を求める質問紙法で行った。質問項目は縫部他（2006）の質問紙を参考にした。これは G. Moskowitz（1976）が作成した外国語教師が備えるべき行動特性の質問項目 36 項目をもとに日本語教育にふさわしい項目を加えたり、削除したりして作成した 41 項目の質問紙である。今回はそれをタイの高校用にアレンジした 45 項目からなる質問紙を作成して、タイ語に翻訳したものを使用した。翻訳は日本語からタイ語に翻訳し、さらにそれを日本語に翻訳するバックトランスレーションを行い、翻訳の的確性を確かめた。調査対象者は、自らが求める日本人日本語教師の行動・態度を、45 項目それぞれについて 5 件法（1＝全く求めない～5＝非常に求める）で評価した。また、この 45 項目以外に日本人教師に求める項目があればタイ語で記述するよう求めた。さらに時間的に余裕があった学校では項目の妥当性や追加項目の有無を聞くために、学生にインタビューを行った。

調査において、対象者から回答しにくいなどという声も聞かれず、削除すべき項目の必要性を見出すことができなかったため、調査で使った 45 項目はそのまま使用することにした。また、調査で得られた記述及びインタビュー調査の分析から、「分かりやすくはっきり話してくれる」「英語でコミュニケーションができる」「タイ語でコミュニケーションができる」「タイ語と日本語の違いを理解している」という項目と、牧（2008）が指摘している服装面の問題を取り上げ、「服装がきちんとしている」という項目を追加して、計 50 項目で行うことにした。

3.2 本調査

3.2.1 調査の実施

学生への調査は 2008 年 8 月から約一ヵ月半、筆者が直接タイ国内で行った。調査方法は、集団形式で質問紙に回答を求める質問紙法と留置調査法を用いた。学生のレベルに偏りがないようにするため、対象学年は全て高校 3 年生とした。また、学習時間数も週当たりの日本語学習時間（コマ）数が 5 コマ以上であることとした。この 5 コマ以上というのは日本語を第二外国語として正規に開講しているということで、大学入試に日本語が選択できるレベル（日本語能力試験 3 級合格レベル）まで学習を進められる時間数である。加えて、いずれの高校でも現在または過去に、多かれ少なかれ日本人教師に関わる授業を受けたことがあることとした。以上の方法で最終的にバンコク及びバンコク近郊の公立高校 25 校の協力を得ることができた。

タイ人教師への調査も学生への調査と同時期に行った。調査方法は、個別または集団形式で質問紙に回答を求める質問紙法と留置調査法、郵送調査法を用いた。その結果、回収総数は 105 に達した。

回収した回答のうち、記入が不完全なものや回答に偏りがあったものなど信頼性が低いとみなされるものは分析から除外した。その結果、最終的な有効回答数は 662（学生 561、教師 101）、有効回答率は 87.9%となった。回答者総数と有効回答者数の内訳を表 1 にまとめた。

表 1 回答者の内訳

	総回答者数 (人)	有効回収者数 (人)	有効回答率
学生	648	561	86.57%
教師	105	101	96.19%
計	753	662	87.92%

3.2.2 データ処理方法

データ処理は SPSS for Windows 15.0J を使用して、求められる教師像の尺度分析を行うために探索的因子分析を行った。そして、因子ごとに教師と学生の下位尺度得点を求め、 t 検定を行った。

4. タイの高校で求められる日本人日本語教師像についての調査結果と考察

4.1 学生及びタイ人教師が求める日本人教師像の尺度分析

まず、学生及びタイ人教師が求める日本人日本語教師像がどのような構成概念を持っているかを調べるために、質問項目 (50 項目) に対する全員のデータに関して探索的に因子分析を行った。因子の抽出に最尤法、プロマックス回転を用いた。因子数は回転後の解釈可能性によって 6 因子を適当と判断した。次に因子負荷量が絶対値で .35 未満の項目を削除し、残った項目について .35 未満の項目がなくなるまで繰り返し因子分析を行った結果、最終的に 30 項目が残った。プロマックス回転後の最終的な因子パターンと因子間相関を次ページに表 2 として示す。なお、回転前の 6 因子で 30 項目の全分散を説明する割合は 52.44% であった。表中の項目の前の数字は質問紙内の項目番号である。探索的な因子分析から得られた 6 因子は以下のように命名した。

第 1 因子は 5 項目で構成されており、「日本語教育に関する資格を持っている」「日本語の指導経験が長い」など教師の資格や経験についての項目が高い負荷量を示していた。そこで「資格と経験」因子と命名した。第 2 因子は 6 項目で構成されており、「授業を面白く、楽しくする」「明るい性格である」「ユーモアがある」など、授業を楽しくするための教師のパーソナリティについての項目で構成されているため「教師の人間性」因子と命名した。第 3 因子は 6 項目で構成されており、「学習者が分からないとき、分かりやすく説明する」「外国語としての日本語教授法に熟達している」「学習者の能力に合わせて授業を進める」など授業の運営に関する項目から構成されているため「授業の実践能力」因子と命名した。第 4 因子は 6 項目で構成されており、「勤勉である」「責任感が強い」「教師としての態度がきちんとしている」など、教師としての規範的な態度などの項目が高い負荷量を示していた。そこで「教師としての態度」因子と命名した。第 5 因子は 3 項目で構成されており、「タイ語でコミュニケーションができる」「タイ語で説明できる」「英語でコミュニケーションができる」と、語学力に関する項目で構成されている。そこで「語学力」因子と命名した。第 6 因子は 4 項目で構成されており、「日本の文化や習慣を体験させてくれる」

表2 探索的因子分析の結果

項目内容	I	II	III	IV	V	VI
I 資格と経験						
28.日本語教育に関する資格を持っている。	.807	.046	.116	.006	-.093	-.099
45.教師の資格を持っている。	.802	-.008	.111	-.058	-.040	-.051
32.修士号または博士号の学位を持っている。	.674	.039	-.101	.016	.067	.056
24.日本語の指導経験が長い。	.538	-.016	.104	.010	.217	-.020
49.服装がきちんとしている。	.403	.038	-.233	.318	-.038	.120
II 教師の人間性						
29.授業を面白く、楽しくする。	.019	.688	.205	-.094	-.016	-.069
39.明るい性格である。	-.040	.659	-.075	.032	.005	.141
3.ユーモアがある。	-.028	.612	-.030	-.056	.024	-.048
33.教室を和やかでくつろいだ雰囲気にする。	.059	.568	.036	.002	-.011	.026
30.学習者が間違っても気まずい思いをさせたり、ばかにしたりしない。	.161	.470	-.075	.090	-.036	-.081
7.楽しんで教えている。	-.058	.385	.294	.187	-.045	-.145
III 授業の実践能力						
11.学習者が分からないとき、分かりやすく説明する。	-.053	.054	.581	-.090	.004	.073
10.外国語としての日本語教授法に熟達している。	.176	-.148	.513	.093	.039	.081
18.学習者の能力に合わせて授業を進める。	-.032	-.066	.469	.197	.000	.113
21.多様な教材、視聴覚教具を用いる。	.162	-.028	.426	-.075	-.049	.164
46.分かりやすくゆっくり話してくれる。	.000	.074	.409	-.031	.145	.101
27.学習者の間違いを適切に訂正することができる。	-.042	.133	.391	.180	.036	.076
IV 教師としての態度						
13.勤勉である。	.026	.000	.036	.662	-.022	.060
8.責任感が強い。	-.024	.030	.135	.622	.031	-.213
4.教師として態度がきちんとしている。	.101	-.034	-.127	.618	-.016	.002
2.教えることに熱心である。	-.044	-.009	.135	.409	-.140	-.036
38.公平である。	-.113	.272	-.085	.358	.026	.229
5.タイ人の考え方や習慣をよく理解している。	.057	-.035	.018	.351	.213	.059
V 語学力						
47.タイ語でコミュニケーションができる。	-.031	-.030	-.019	-.015	1.026	-.077
23.タイ語で説明することができる。	-.008	-.039	.174	-.053	.765	-.070
48.英語でコミュニケーションができる。	.083	.090	-.100	.009	.593	.047
VI 異文化接触						
42.日本の文化や習慣を体験させてくれる。	-.059	.028	.194	-.178	-.091	.680
25.日本の文化・習慣について幅広い知識がある。	.013	-.129	.206	.143	-.124	.577
43.タイでの生活に適応している。	-.083	-.004	.109	.153	.186	.404
41.日本の今の流行を紹介してくれる。	.116	.225	-.077	-.323	.084	.403
因子間相関	I	II	III	IV	V	VI
I	—	.241	.132	.293	.496	.423
II		—	.382	.212	.415	.545
III			—	.364	.272	.246
IV				—	.095	.255
V					—	.445
VI						—

「日本の文化・習慣について幅広い知識がある」が高い負荷量を示していたが、「タイでの生活に適応している」という項目も含まれているため「異文化接触」因子と命名した。

4.2 下位尺度間の関連

次に、学生及びタイ人日本語教師が求める教師像の下位尺度間相関を表3に示す。6つの下位尺度は互いに有意な正の相関を示した。

表3 下位尺度間相関と平均、 SD （標準偏差）、 α 係数

	資格経験	人間性	実践能力	態度	語学力	異文化	平均	SD	α
資格経験	—	.26**	.29**	.33**	.44**	.33**	3.42	.76	.80
人間性		—	.40**	.28**	.32**	.44**	4.44	.46	.73
実践能力			—	.39**	.33**	.39**	4.49	.40	.70
態度				—	.14**	.20**	4.32	.43	.68
語学力					—	.37**	3.87	.84	.82
異文化						—	4.09	.54	.59

** $p < .01$

さらに、それぞれが求める日本人教師像の6つの下位尺度に相当する項目の平均値を算出し、「資格と経験」下位尺度得点（平均 3.42, SD 0.76）、「教師の人間性」下位尺度得点（平均 4.44, SD 0.46）、「授業の実践能力」下位尺度得点（平均 4.49, SD 0.40）、「教師としての態度」下位尺度得点（平均 4.32, SD 0.43）、「語学力」下位尺度得点（平均 3.87, SD 0.84）、「異文化接触」下位尺度得点（平均 4.09, SD 0.54）とした。内的整合性を検討するために各下位尺度の α 係数を算出したところ、「資格と経験」で $\alpha = .80$ 、「教師の人間性」で $\alpha = .73$ 、「授業の実践能力」で $\alpha = .70$ 、「教師としての態度」で $\alpha = .68$ 、「語学力」で $\alpha = .82$ 、「異文化接触」で $\alpha = .59$ となり、「異文化接触」の値がやや低いが、信頼性に著しく欠けるという値ではなく、ある程度の値が得られたと言える。

この結果、最も高く評定された因子は「授業の実践能力」であった。しかし、次に高く評定された因子「教師の人間性」と0.05ポイント、さらに「教師としての態度」とも0.17ポイントしか差がなく、ほぼ同程度に重視されているということが言える。一方、最も低く評定された因子は「資格と経験」であった。その次に低く評定された「語学力」とともに4.0ポイントを割っており、上記の3因子と比較するとそれほど重要視されていないと考えられる。各因子の平均値をグラフ化したものを図1に示す。

4.3 学生と教師間の差の検討

最後に、学生と教師間の差の検討を行うためにそれぞれが求める教師像の下位尺度得点について t 検定を行った。学生と教師の平均値と SD および t 検定の結果を表4に示す。 t 検定の結果、「教師の人間性」下位尺度 ($t(660) = 6.95, p < .001$) と「語学力」下位尺度 ($t(660) = 10.62, p < .001$) と「異文化接触」下位尺度 ($t(660) = 6.67, p < .001$) については、教師よりも学生のほうが有意に

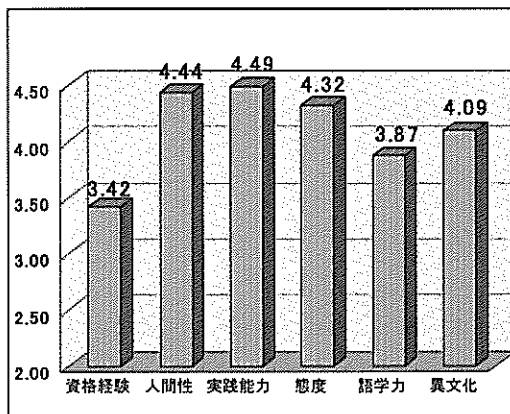


図1 各因子の下位尺度得点

高い得点を示していた。また、「教師としての態度」下位尺度 ($t(660)=-4.38, p<.001$) については、学生よりも教師のほうが有意に高い得点を示していた。「資格と経験」下位尺度 ($t(660)=1.77, n.s.$) と「授業の実践能力」下位尺度 ($t(660)=1.20, n.s.$) については学生と教師間の得点差は有意ではなかった。

このことから、前節で重要視されているとした因子「授業の実践能力」に関しては、学生と教師間に有意な差はなく、どちらも高く重要視していることがうかがえる。しかし、「教師の人間性」は学生のほうが、また「教師としての態度」は教師のほうが高く評定している。これは、学生が和やかで楽しい授業を作り出すことができる教師のパーソナリティをより重視しているのに対して、教師は責任を持って真面目に仕事に取り組む教師としての態度をより重視していることを示している。また、「異文化接触」に表される日本の文化や習慣を紹介してもらいたいという因子は学生のほうがより強く求めていることが明らかになった。一方、前節でそれほど重要視されていないとした「資格と経験」は学生、教師とも有意な差がなく、どちらもあまり重要視していないという結果になった。しかし、「語学力」に関しては学生と教師の差が最も開いており、学生のほうがより強く求めているという結果が出た。これは、タイ人教師は日本人教師に対して、日本語母語話者としての役割を求めており、日本人教師が媒介語を使用することをあまり求めていない

表4 学生と教師の平均値とSDおよびt検定の結果

	学生		教師		t 値
	平均	SD	平均	SD	
資格経験	3.44	.77	3.30	.68	1.77
人間性	4.49	.43	4.16	.49	6.95***
実践能力	4.50	.40	4.45	.39	1.20
態度	4.29	.43	4.49	.40	- 4.38***
語学力	4.01	.78	3.12	.76	10.62***
異文化	4.14	.53	3.77	.49	6.67***

*** $p<.001$

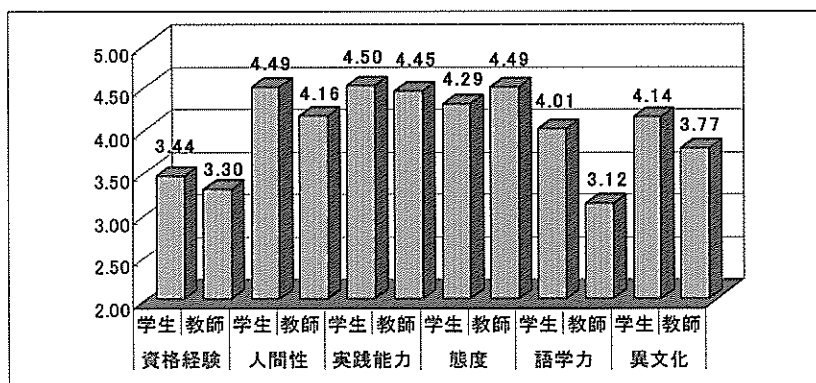


図2 学生と教師の各因子別平均値

ということが言える。それに対して、学生はコミュニケーションをとるためにタイ語または英語を話すことを日本人教師に求めていると考えられる。学生と教師の各因子別平均値をグラフ化したものを図2に示す。

4.4 考察

調査の結果、学生と教師が求める傾向には多少違いが見られるが、タイの高校で日本人日本語教師に最も強く求められるのは、分かりやすい授業をつくり出す「授業の実践能力」、学習者への配慮がある和やかで明るい「教師の人間性」、熱心に責任を持って職務にあたる「教師としての態度」であった。日本人教師は日本語の専門家であると同時に、教育者であり、一人の人間であることを求められているということであろう。また、学生の異文化理解を深めるために、日本の文化や習慣を紹介する活動が効果的に行える能力を特に学生が求めていることが明らかになった。この点に関しては、日本人教師に日本語教授以外の得意分野があれば、より一層、力を発揮できるであろう。さらに、タイ語の運用能力を高める努力が必要である。特に学生は、日本人教師がタイ語を理解することで、疑問点を直接質問できるほか、外国人と接する上で生じる不安や緊張を緩和させることができると考えているようである。また、日本人教師がタイ語の特徴を知っていることで学生の誤用の傾向を把握でき、授業運営に役に立つばかりでなく、関係者とのコミュニケーションにも有益である。最後に、資格や経験に関してはあまり重要視されていないようである。しかし、日本語教師としての高い専門性や教授力が期待されているということは、日本語教師として一定の訓練を受けている必要があると考えられる。

ここで、求められる教師であるために日本人教師自身にとって必要である能力をもう一つ提案したい。横溝（2002）は、「自分の持っている『どう教えるか』についての考えを、自分の教育現場の実際に応じて捉え直し、それを実践し、その結果を観察し内省して、より良き授業を目指すことができる能力を、教師は要求される」（p.55）と述べているが、こうした教師の自己成長に寄与するのが「自己教育力」である。タイの高校で教えるにあたって、日本人教師はまずタイの社会や文化、人々の考え方や習慣など学生を取り巻く社会的な状況を踏まえることが大切である。そして、学生のレベルや学習環境、今までの学習経験や学習スタイルなどを知った上で、その状況に合わせて授業を展開することが望ましいと言えよう。しかし、こうした状況を知るには、時間がかかることが予想される。過去に大学や養成講座等で学んできたこと、または他国や他機関で行ってきた実践がそのままは使えないであろうと考えられる。そこで、今までの自分の考えや態度をタイの社会に合うように調整したり、教え方を工夫することが必要になってくる。これが「自己教育力」である。そして、この能力は調査から見えてきた6因子と密接に関わりあっており、タイの高校で求められる日本人教師の能力の一つであると言えよう。タイで日本人教師が「自己教育力」を高める場は多いとは言えないが、各地に教師会が存在しており、定例会やセミナー

等を開催している。こうした機会を積極的に利用し、発表を聞いたり、参加者と交流を図ることで、自己成長の契機となるであろう。

また、文化庁・日本語教員の養成に関する調査研究協力者会議（2000）⁽²⁾ は、海外における初等中等教育機関での日本語学習者が増加していることを受けて、日本語教員養成に係る科目と初等中等教員免許取得に必要な科目を組み合わせた横断的なカリキュラムを教員養成課程に提案している。これは、海外の初等中等教育機関で教えるには日本の教員免許を持っていることが望ましいということを示唆している。教員免許を取得するための教職課程では、教育の理念や教職の意義、教師の役割、児童生徒の心身の発達や学習過程、教育相談といった科目の履修が必要であるが、これらは教師としての態度や人間性を形成する基礎となるものである。これらはタイの高校で強く求められる「教師の人間性」や「教師としての態度」に寄与するものである。教師としての使命感を培い、学生への心理面での配慮ができる基礎的な素養を身につけることで、日本語を教え習わせる「教習」だけでなく、人間形成に作用するすべての精神的影響である「教育」に携わることにつながるであろう。そして、日本語を通して「教育」ができる教師が、タイの高校で求められる日本人教師であると言えるのではないかと考える。

5. 問題点と今後の課題

最後に本研究の問題点について触れる。まず、調査対象者のサンプリングの問題がある。サンプリングは完全な無作為抽出法ではなく、有意抽出法であった。そのため、厳密な意味では「タイの高校で日本語を学ぶ学生」「タイ人教師」全体という母集団を代表していたとは言えないであろう。次に調査に関して言えば、言語の問題がある。質問はすべて日本語で作成したものをタイ語に翻訳して、回答を得た。翻訳の信頼性を高めるためにバックトランスレーションを行ったが、依然としてタイ語と日本語の間による解釈の違いがあったかもしれない。もうひとつは質問項目の数である。質問項目は全部で 50 項目であったが、項目数が多く、回答者の心理的負担が重かったようである。この点で、回答の信頼性が低くなったことも否めない。最後に、本研究で調査の対象としたのは、二者（学習者と同僚であるタイ人教師）のみであったが、学校長など管理職の立場にある人も含めるべきだったかもしれない。これにより、学校としてどのような日本人教師を求めるのかという視点が加わり、より広い視野に立った成果が得られたのではないかと考えられる。

以上のような問題点は残しているが、本研究ではタイの高校で求められる日本人日本語教師像を実証的に示すことができた。また、学生とタイ人教師の意識の違いも明らかにすることができた。この点に関しては、意義があると言えるだろう。本研究の成果がタイの日本語教育を理解する一助となればと考える。

謝辞

調査に協力してくださったすべての皆様に、この場を借りてお礼申し上げます。

注

- (1) 国際交流基金「日本語教育国別情報 2007-2008 年度 タイ」(2008 年 11 月 10 日閲覧)

<http://www.jpf.go.jp/j/japanese/survey/country/2007-2008/thailand.html>

- (2) 文化庁・日本語教員の養成に関する調査研究協力者会議 (2000)「日本語教育のための教員養成について」(2008 年 12 月 28 日閲覧) www.bunka.go.jp/file_1/1000010839_materials.pdf

参考文献

伊勢田涼子他 (1997)「海外で教える日本人日本語教師養成についての基礎的研究」平成 8 年度科学研究費補助金 (国際学術研究) 研究成果報告書

小塩真司 (2005)『事例研究で学ぶ SPSS と Amos による心理・調査データ解析』東京図書

佐久間勝彦 (1999)「海外で教える日本人日本語教師をめぐる現状と課題 タイでの聞き取りを中心に」『世界の日本語教育〈日本語教育事情報告編〉』第 5 号、国際交流基金日本語国際センター、pp.79-107

縫部義憲 (2001)「日本語教師の成長プログラム」『大学日本語教員養成課程において必要とされる新たな教育内容と方法に関する成長プログラム』日本語教員養成課程研究委員会、pp.21-28

縫部義憲、渡部倫子他 (2006)「学習者が求める日本語教師の行動特性の構成概念」『日本語教員養成における実践能力の育成と教育実習の理念に関する調査研究』平成 16 年度～平成 17 年度科学研究費補助金基盤研究 (B) 研究成果報告書、研究代表者 中川良雄、pp.94-105

牧貴愛 (2008)「求められる日本語教員に日本語教員養成課程はどう応えるか」に関する総合的研究 (2) —平成 19 年度調査中間報告— 第 IV 部その 2 タイにおける日本人教員をめぐる問題から得られる示唆」『無差』第 15 号、京都外国語大学日本語学科、pp.87-95

家根橋伸子、高木裕子他 (2006)「学習者が求める日本語教師の行動特性 (2) —タイの大学生の場合—」『日本語教員養成における実践能力の育成と教育実習の理念に関する調査研究』平成 16 年度～平成 17 年度科学研究費補助金基盤研究 (B) 研究成果報告書、研究代表者 中川良雄、pp.108-109

横溝紳一郎 (2002)「日本語教師の資質に関する一考察：先行研究調査より」『広島大学日本語教育研究』12 号、広島大学教育学部日本語教育学講座、pp.49-58

Moskovitz, G. 1976 The classroom interaction of outstanding foreign language teachers. *Foreign Language Annals* 19. 2, 135-137